二〇二五年二月二十日

学校の梅がきれいに咲いている。シンジョーは昨日、担任からこの話を聞いて、登校してきたときに、梅を見た。確かに白も赤もきれいに咲いている。

シンジョーは登校しながら、今日のことをいろいろ考えた。卒業までは、あと二十五日だ。一日の流れを登校の時から考えるのは、シンジョーにとっては珍しかったが、それほど今日はいろんなことがあるのだった。

一時間目は校長先生が算数の授業をしてくれる。二時間目は、卒業式の呼びかけのオーディション。三時間目と四時間目が六年生を送る会の最後の練習。五時間目が国語の発表。保護者会なので、たくさんの親が見ている前で発表することになる。

この「今、私は、ぼくは」の発表原稿作りには、三つの条件があった。一つ目は、小学校時代の思い出を入れること。二つ目には、将来の夢や目標、なりたい姿を入れること。そして三つ目が、家族への感謝である。シンジョーは、運動会の思い出を語り、最後まで

あきらめずに、負けずにがんばる大人になることをまとめた。家族への感謝の部分は、

「今まで支えてくれてありがとうございます。

これからもよろしくお願いします」

でまとめたが、たったこれだけがなかなか書けなかった

条件があるのは、原稿作りだけではなかった。発表の時にもある。それは二つだ。一つは原稿を見ないこと。自分が映し出すテレビ画面は見てもよいが、担任に合格をもらった原稿は、発表の時は持たない。そしてもう一つ一つが、発表中に三度は親の顔・目を見ることだ。これを知ったとき、シンジョーは考えただけで照れくさくなった。母の目を見て「ありがとうございます」なんて、言えるだろうか。クラスのみんなも見ている中で。

五時間目が始まった。教室の机はすべて廊下に出された。教室の後ろに並べられたイスには、保護者が座っている。並べられたイスが全部使われていることから、全員の保護者がいるのだと、シンジョーは思った。立って見ているのは、きっと誰かのお祖父さん、お祖母さんだろう。

担任から保護者に向けて説明をした後に、一人目が前に立った。

「私の夢は、母のような看護士になることです」と、堂々とスピーチを始めた。テレビ画面には、親子で旅行した写真が映し出された。母親へのインタビュー動画も流れた。

「私は父と母のおかげで、今日まで幸せに生活できました。本当に感謝しています。いつもはなかなか言えないけど、今日は心を込めてお礼を言います。お母さん、いつもありがとう」

最後の方は、涙を流しながら声がつまって

いた。教室の後ろからもすすり泣く声が聞こえてきた。それだけではない、シンジョーの周りの子も数人、ハンカチで涙を拭いていた。シンジョーも感動してしまっていた。

次々に前に出て、発表をしていったが、ほとんどの子が最後は涙で話を終えた。中には、前に立った時から泣き出している子もいた。教室を回ってきた校長先生や教頭先生も、目を赤くしていた。

シンジョーの出番が迫ってきた。シンジョーは教室の前に移動して、自分の前の人の発表を聞いた。

「私は、小学校生活で大きな二つのことを学びました。一つは仲間です。そしてもう一つがあきらめないことです。最後の運動会で私は、何度も心が折れかけました。そんなときに・・・」

テレビ画面には、運動会の時の写真が何枚も映し出された。その写真を見て涙している子が何人かいた。最後は、泣きながら

「みんな、私を一人にしないでくれて、本当にありがとう。そして、素直になれない私にいつも優しくしてくれたお母さん、本当にありがとう。私はこれから、友達にも家族にも素直にありがとうと言える人になります。」

と語った。大きな拍手と泣き声が聞こえてくる。自分の番になったシンジョーは、中央に移動し、語り始めた。

「私は、がんばって負けない大人になります。冬休みに校長先生から宿題が出たときに、この答えが出ました。私はいつも目標を立ててもそれが達成できませんでした。ある時、父に、毎日続けていることをほめられたことがあります。その時に、続けていれば目標は達成できることに気づきました。」

シンジョーは、前の子の発表でもらいかけた涙をこらえながら、必死に話した。シンジョーは写真を使わずに、文字だけでプレゼンを行った。遠足での思い出と五十周年式典の思い出を語り、いよいよ最後、家族への感謝を述べる所に来た。作った原稿では、当たり障りのない文章だったが、シンジョーは、今の自分の思いを話し出した。

「最後になりましたが、私の家族への思いを話します。みんなみたいに、ありがとうと言うのは照れてしまって、上手にできませんでした。いろいろ考えましたが、今、私が一番

母に伝えたいことを話します。」

シンジョーは、一番後ろに座っている母を見た。母は照れくさそうに、少し下を見ている気がした。

「お母さんにお願いしたいことがあります。それは、いつまでも変わらずにいて下さいということです。元気で明るく、悪いことをしたらビシッと叱って、楽しいことがあれば大声で笑って・・・」

教室には、少し笑いが起きた。

「お母さんが元気だから、私もがんばれたと思います。これからもたくさん心配をかけ

ると思いますけど、家族みんながお母さん
を頼りにしています。絶対に、いつまでも
変わらない元気で明るいお母さんでいてく
ださい。お願いします。」

シンジョーも、他の子と同じように、いい
ながら涙が出てきた。他の子も泣いている。
母を見ると、下を向いてクスクス笑っている
ように見えた。泣いているようにも見えた。

全員の発表が終わると、担任が保護者に感
想を求めた。すると、シンジョーの母が手を
挙げた。担任に指名されると、話し出した。

「皆さんのすばらしい発表を聞いて、とても
感動しました。子供が何を考えているのか
も分かりました。今日は、子供からお願い
をされたので、私もこの場を借りて、自分
の子にお願いを一つします。」

シンジョーはドキドキしながら母の話を聴
いていた。何を言い出すんだろう。お願いっ
て何だろう。そんなシンジョーの気持ちを知
ってか知らずか、母は話を続けた。

「これからも毎日一緒に、ご飯を食べてくだ
さい。母は、子と食事をする時間が、一日
で一番幸せなんです。どうぞよろしくお願

いします。」

近くにいた保護者もうなずいていた。担任は、ハンカチで涙を拭いていた。子供たちからは、大きな拍手と共に「そんなことか」という声も上がった。シンジョーはとても嬉しかった。そしてこれからどんなことがあっても、母と食事を、毎日一緒にしようと思った。

下校後、友達と遊んで家に帰った。「ただいま！」と言うと、「おかえり」と母が台所から言ってくれた。

お母さんの　においみたいな

ぼくらの　ふるさと

母の歌う校歌が、野菜を切る包丁の音に合っていて、心地よかった。

シンジョーは、今日も母や家族と一緒に食事ができることを、なんだかとっても幸せなことだと思った。